

『細雪』に関する谷崎潤一郎の新資料について

中 田 葉 子

小稿では、谷崎潤一郎の未発掘のはがきを紹介し、これについて若干のコメントを加えることにする。谷崎の書簡類についてはすでに多くが明らかになっており、研究も見られる。

しかし、ここでののはがきは、これまでまったく知られていないものである。次のような文献や機関を調査したが、いずれも、未発掘という事実を裏付けることに帰した。

『谷崎潤一郎全集』（昭和五十六・五十八年、中央公論社）

野村尚吾『谷崎潤一郎 風土と文学』（昭和四十八年、中央公論社）

水上勉編『谷崎先生の書簡』（平成三年、中央公論社）
各種文学辞典など。

国立国会図書館、日本近代文学館、芦屋市谷崎潤一郎記念館、岡山県勝山町郷土資料館ほか。

こののはがきは、『細雪』の装丁に関する有益な情報を含む点で意義をもつ。

はがきの真贋であるが、本物ということは間違いない。丸みをおびた谷崎独特の筆跡がなによりもそれを証する。

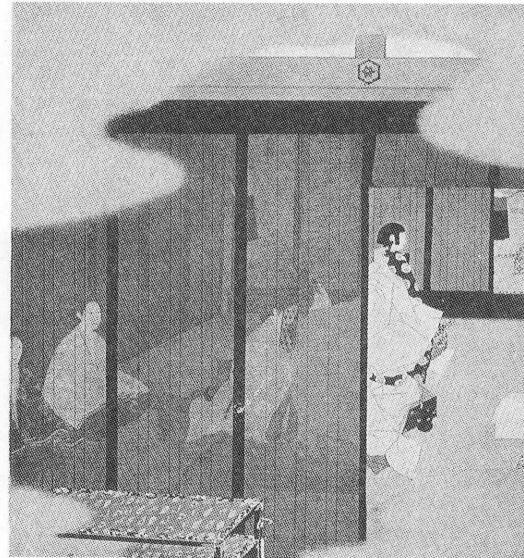
谷崎の他の書簡上の筆跡とも一致する。

はがきに窺える情報もまた、本物であることを物語る。すなわち、時期・住所・宛先・用件のくだりは、谷崎の

「越冬記」（昭和三十四年版『谷崎潤一郎全集』第三十巻、中央公論社）や吉野順子「谷崎潤一郎の疎開生活」（『明治文化研究』第五集）などから知る彼の動静とも折り合う。

はがきの出された時期は昭和二十年一月で、日付は同月二十日。住所は、疎開中の谷崎が転居したばかりの岡山県勝山町・今田ツネ方である。鳥取県倉吉町に、これも同じく疎開していた画人の菅楯彦が宛先となっている。当時、菅は同町の小川貞寿方に寄寓していた。用件は『細雪』の

おれは日本に生れた
 日本に生れたおれは
 日本に生れたおれは
 日本に生れたおれは



おれは日本に生れた
 日本に生れたおれは
 日本に生れたおれは
 日本に生れたおれは



郵便便

鳥取県倉吉町
 河原町小川様方
 菅楠彦様

岡山県倉吉町
 河原町小川様方
 菅楠彦様

おれは日本に生れた
 日本に生れたおれは
 日本に生れたおれは
 日本に生れたおれは

装丁についてである。

このはがきは、鳥取県倉吉市で旧師の収蔵文書の中から、私が発見した。以下、全文を引く。

新年の御慶

後扱

目出度申納候

にて申

旧臘細雪装

上べく候

釘御願申上候処

間先ハ

昨日出版書肆

それまで

より来電、函も

表紙の方

何とかして作り度

も御待ち

旨申越候二付又

ヒ下

新たな御考

度御

案も可有之哉と

願申上候

存じ

小生今回

一寸御

表記の

通知

家に引

申上候

移申候

追て

正月

詳細ハ

二十日

一般に作家の書簡類の価値は、①代表作に関するもの、

②作家の思想や行動をめぐるもの、③辞令的なもの、の順に大別されるという。ここでのはがきは①にあたる。したがって、その価値は自ずから認められよう。

この価値を具体的にいえば、それはまず、すでに述べたような『細雪』の装丁事情を明かす点に求められる。このはがきにより、菅に装丁を頼んだ時期が昭和十九年十二月であることがはっきりする。二十年一月に差し出された書面上には「旧臘」とある。

そればかりではない。初めは予定になかった函が、二十年一月になつて付くようになった事実も明かされている。「昨日出版書肆より来電、函も何とかして作り度旨申越候」。いま引用した同月二十日付のはがきである。発行元の中央公論社からの申し出であつた。

こうしたことは、従来、知られていなかった。はがきの持つ具体的な価値のひとつである。

なお、函の話は、以前から谷崎と中央公論社との間で出ていたようだ。谷崎が中央公論社の『細雪』担当編集者小瀧^{あし}穆へあてた、四日前の十六日付の書簡（芦屋市谷崎潤一郎記念館蔵）による。ただ、いつからその話が出ていたかは、さしあたって断定できない。

具体的な価値としては、さらにいまひとつ、つぎのような指摘もできる。

知られるように、谷崎は本の装丁に対してかなりのこだわりをもっていた。加えて、当時は出版物に函を付けることなど望むべくもないときだった。太平洋戦争の敗戦前で、用紙が極端に不足していたのである。こうした背景を考えるならば、函の付くことへの谷崎の喜びが、はがき全体に表れているのもふしぎではない。

そのうえ、函の付く対象は、戦争下にあつてのまさしく谷崎自身ともいえる『細雪』なのである。嬉しかったにちがいない。だから、はがきからは彼の喜びが感じ取れるわけである。と同時に、その喜びが、彼がこの作品をいかに大事にしていたかを、如実に語ってくれてもいるのである。つまり、はがきは『細雪』に対する谷崎の熱意の証明にほかならない。これが、はがきのもつ、もうひとつの具体的な価値である。

最後になったが、当時の谷崎は『細雪』の執筆に専念し、戦争には背を向けていたと、およそ解されている。しかし、これを覆す戦争末期の彼の発言談話が出てきた。岡山県津山市への疎開当初のもので、昭和二十年六月五日付の岡山の「合同新聞」（現「山陽新聞」）に載る。「谷崎氏疎開、兵庫県から津山へ」の談話記事である。

たとえば、「頻襲して来るB29の醜翼を見てゐるうち、私はつくづく神風特攻隊として出て行くいまの若い人が羨

しくなつた」云々。「醜翼」までを使い、きわめて激しい。その全発言はこうである。

頻襲して来るB29の醜翼を見てゐるうち、私はつくづく神風特攻隊として出て行くいまの若い人が羨しくなつた、こちらへ疎開して以来心も落着いたのでした。つまり勉強したいと思つてゐる一般では今度の戦争は口でこそ長期戦だといひながら実際は早く片づくと思つてゐるが、然し私は相当長期に亘るものと考へるのでまづ防空壕の完全なものを造り、自ら土を耕して自活の途を開き、進んで戦ひに勝つ苦しみ、生きる艱苦を、今日千載一遇のこの機会に、との気魄で乗り切りたい、然してあくまで皇国の必勝を信じ作家としての職域に邁進したいと思つてゐる

この発言も、前掲のような諸文献や諸機関などで調査したが、はがきと同様にこれまで知られていないものであつた。最近の成果であるドナルド・キーン『日本文学の歴史』12（平成八年、中央公論社）ほかにもふれられていない。はがきを考証する過程で、岡山県総合文化センターの図書館において、これも私が発掘した。谷崎と戦争をめぐる問題に一石を投じる有益な新材料といえよう。

（付記） 本稿は平成九年三月に文学部国文学科へ提出した卒業論文

全六〇枚（四百字詰）・一二〇頁を踏まえたものである。

なお、同年四月二十八日付「朝日新聞」（大阪本社版夕刊）にもここでの話がきを紹介した記事があり、また、同年八月十四日付「産経新聞」（東京本社版夕刊）や「神戸新聞」（夕刊）などにも同じくここでの戦争末期発言談話についての、簡略な紹介記事が掲載された。

